

東京女子医科大学看護学会第9回学術集会 シンポジウム

「看護教育にリベラルアーツはどのように貢献する可能性を持っているか？」

## 看護における言葉と身体—哲学の立場から—

丹木 博一（上智大学短期大学部）

リベラルアーツとは本来、その有用性ゆえに学ぶべき特殊な知識や技術ではなく、人間としての徳の形成を促し、人を自由にする事ができる純粋に理性的な学芸を意味している。看護教育においてリベラルアーツが必要とされる理由も、どこまでも自由な考察の視点を与えてくれるところにあると、私は考える。リベラルアーツは、看護学の専門教育に先立って一般教養として身につけておくべきものというより、日々の看護実践を、人間にとってケアとは何かといった根本的で普遍的な問いの地平から再定義することを可能にしてくれるものなのである。哲学がそうしたリベラルアーツの使命の一翼を担いうることを示すために、当日は、臨床場における身体と言語についての現象学的考察を例に挙げた。

私たちはみずからの身体を介して自己と世界を理解している。そのため身体が病むことは、自己や世界の変容を意味せずにはおかない。医療がもっぱら疾患にのみ目を向け、それを取り除くことだけを目標とするのではなく、病気や障害の意味を問い、病気に対する患者の理解や対処の仕方にも配慮のまなざしを向けながら、患者のセルフケアをケアするという課題にも取り組むべきだと考えるなら、私たちは、患者自身の病気や障害の経験から学ばなければならない。そのためには、患者にみずからの病気の経験を安心して語ってもらえるように、言語化困難な経験を言葉にすることができるような協同の場を育んでいくことが必要である。こうした営みは、患者をよりよく理解することに資するだけでなく、この取り組み自身が苦しみを軽減し健康を取り戻すための重要なケアとなりうるのではないかと想像する。一人ひとりの自立的な主体性が成立するのは、信頼の絆で結びついた協同行為によってなのである。哲学と看護学との活発な相互交流が進み、ケアの可能性の奥行きが今少しずつ明らかになってきている。